三翠化学

（題字は稲川先生）

第4号
昭和51年1月20日　発行
三翠化学会
津市上浜町1515
三重大学農学部
農芸化学科内
振替名古屋59345
電話（津）<0592>(32)1211

順調な歩みと発展

三翠化学会結成二ケ年

昭和四十八年十一月二十四日、三重県知事田川亮三氏（農科15回卒）をはじめ多数の来賓の出席を得て、三翠会館で設立総会をもったことは会員諸子の記憶の新しいところである。

当初このような組織を発足し、第二回、第三回の総会に参集された会員数、会費の納入状況、それに会員のこの会に対する期待と熱意を感じるとき、きわめて順調に歩み続けていると判断される。事実この会を通してお互いのコミュニケーションに大いに役立ち、公私ともにいろいろの便宜が得られたという報告が多数よせられている。

学内における事務局体制も組織され、会の運営に支障ない基盤が整備された。

他の学科の組織もこの二ケ年に大いに強化され、それぞれの分野で大きな役割を果している。三翠会全体としての組織は現在いろいろの角度から検討されつゝあり、その機運は大いに熟しつつあるという状況である。

三翠化学会に対する貴重な意見を全部とり上げていくことはむつかしいにしても、この会の性格を十分考慮し、とくに若い会員の意向を尊重していかなければならないであろう。

昭和五十一年は結成三周年となる。五月下旬に予定される総会には多数の諸子の出席を期待するものである。

「三翠人語」

京都女子大の高取正男氏の書かれた「日本的思考の原型」に馬と牛の特質が興味深く記されている。昔の我が国には「馬の道」と「牛の道」とがあり、前者が表街道、後者が裏街道である。物を運ぶに当たって大昔は人が担いでいたのが次に牛の背にのせ、やがて馬の背へと移り変り、それにつれて道路も整備されて街道の発達になったという。

ここで考えさせられるのは牛と馬の違いだろう。牛はスピードはのろいが粗食に耐え、急坂にも強く持久力にすぐれている。馬はたしかに速度も早く力も強いが、管理がむつかしい。

そこで馬は支配者の輸送手段となり、逆に牛は農民と共に荷物を運び田畠を耕したと記されている。

牛と馬の得失はそれぞれあろうが、これからの我国は「牛の道」の歴史を見直す絶好の機会が来たように思われる。高度成長政策の行き詰り、資源不足等我国をとりまく環境が一段ときびしい折柄一歩一歩と確実にゆっくり歩を進めて行く「牛の歩み」は、これからの険岨な道を行くのに最適な方法であるように思うのだが。

◇　◇

小生は何事につけても「実験」の礼賛主義者である。農芸化学科を卒業したのだから当然かも知れないが、小生がここでいう実験とは自分が未知のものを実際に試す。実際に経験するという実験である。実験を行なう時は、判らないことが多くても一応自分の頭の中で考えをまとめ、これが正しいかどうか確認の為に実験をする。その結果が当初の考えと同じであれば競馬の予想が当たった時と同じく痛快な気分を味えるし結果が予想と違ってもまた別の発見が出来て自信がつくものである。小生は民間企業に勤めているが、社内の者にあれやこれやの議論はほどほどにして早く実験テストの上現場で実行に移せといっている。また、よく「自然科学は実験が出来るが、人文科学はまず実験は不可能だ」といわれているが、小生は販売や労務面でもロスやリスク防止の点から実験をすすめている。

少しオーバーな表現かも知れないが「実験」を行なうことは、その人の人生に自信と積極性と確実性をつけるのに役立つと信じている。

一老人の社会観

稲川次郎

私は本学部の前身の三重高等農林学校の創設の翌年の大正十二年に同校教授に任命されてから農科の主事を勤めた事もありましたが戦後に農産製造科農芸化学科の新設に関与し微力乍ら主任として農芸化学科の発展に努め昭和三十五年十月に大学を定年退官しました。

退官後は、名城大学農学部、名古屋女子大学、三重短大等に講義を続けましたが数年前に老境化を自覚し、引退生活を続けて居ります。数年来老人病である動脈硬化から心臓に欠陥が指摘され五〇年二月には「心筋硬そく」で二ヶ月程入院治療し更に六月には心臓喘息で三週間程入院の結果、現在は至極順調で天気の良い日は公園の散歩を日課として居ります。発作が起れば至急適当な手当が必須ですが常時診察を受けて居る医師が立派な方で深夜でも往診して戴けますので数回急場を救われて居ります。

今後も更に若干世の移り変りを見る事が出来ると楽しんで居ります。

偖て私の少、青年には日進月歩という言葉が良く使われましたが夫れは今も変り無く続いて居り、私し共の生活を続けた五十年、六十年間の各方面に亘る進歩発達振りは誠に目醒しいものでありました。一面社会も人も人の考え方も特に近年の短い期間に激しい速度で移り変り宛ある事が痛感され私共老人の思考力を遙かに超えて来て日本の将来に聊か不安の念を抱く思いが致します。日本的の視野で無く世界的視野で物事を考える事の大切さは良く判りますが私し共老人には、日本の日本人の発展という事がより根本的に大切であるように思われてなりません。遠い将来の日本の在り方を予測する事は到底困難であるが昭和四十四年五月に全国総合開発計画が四十年にさかのぼり昭和六十年度迄の二十年を目標するものと政府決定したが此の計画策定当時の高度成長と情報社会の進展を背景に具体的な開発戦力として大規模開発プロジェクトを打ち出した。つまり巨大な開発基地の開発と大都市と地方を結ぶ交通、通信網の体制化の構想であった。之が前田中内閣の日本列島改造計画と結び付き全国的な地価の暴騰、公害撒散などの歪みを生み国民の批判が高まった。夫れに四十八年以後の経済活動の停滞と環境問題。エネルギー、食糧問題の制約の強まる中で僅か四、五年で新しい国土開発の計画の再検討が迫られ今度五十年度から昭和六十年の十年間の新しい全国総合開発計画の基本計画の計画概要が最近まとまった。その主なものは、昭和六〇年度の人口世帯数。生活時間数を予想して人口は約二百万人の増加し、人口の老齢化と都市集中化と高学歴化が進む。更に労働人口の都市集中化も避けられず夫れでは土地、水、自然等の国土資源の壁は破られず居住関係は一層悪化する。之等の基本的要素の上に次の国土開発計画が策定される事になろうが立派な計画が立案されても絵に書いた餅で果して成果が達成されるか疑わしい。我が三重大学の農芸化学科の目醒しい発展。同窓生の三翠化学会の着実な活動振りは嘗ての旧職員の誇りであるが国民生活の基盤である食糧問題には農芸化学関係者の役割は非常に重大と思う。人口の増加は必至の状勢にあり我国の食糧自給率は半分にも足り無い。食糧の附加価値の増進と新しい食糧の合成微生物利用の新食糧の開発等、其他各の方面に活躍される諸賢の御健闘を祈って止みません。

古典漁り

長瀬重蔵

昭和三十七年春、停年退官後、津市の井村屋製菓、滝野蛋白工業、岡崎市の岡田海藻工業等の研究室に関係し、また請われて名古屋市のすみれ女子短大、大府市の中京女子大、伊勢市の皇学館女子短大等で生活科学や食品学関係の女子教育に参与したが、一応五十年三月末で辞退し、依然として日本澱粉学会・日本食品工業学会・日本栄養食品協会等に関係する外は、食品や栄養関係の「古典漁り」を楽んでいる。

先ず東海地方の古典の宝庫としては、名古屋市東区徳川町の「蓬左文庫」（ほうさは名古屋の古名）で、藩祖徳川義直侯が父家康から譲られた駿府御譲本を基礎に一万五千余冊を集め、其の後歴代藩主も亦和漢蘭書を加えて現在蔵書は六万七千余冊といわれ、旧大名の文庫としては、現在加賀前田家の「尊経閣文庫」と並んで双璧と謂われる。幸に蓬左文庫では数年前から、「善本解題図録」第一輯として御譲本中の和書三〇種、第二輯として同漢籍三七種、並びに第三輯として御譲本以外の奈良・平安時代の和書三〇種と夫々発行、希望者に分譲されるようになったのは有難い。

斯の第二輯中に重要文化財に指定されている後魏の賈思勰撰の斉民要術九巻二二軸（木軸に巻物とする）があり、六世紀頃の北中支の一般庶民の農業経済書と称えられ、之を発見した農林省農業総合研究所の小出満二氏等の示唆により鹿児島大の西山武一並びに宇都宮大の熊代幸雄の両教授が訳註して上下二巻（各巻夫々三五〇頁）として昭和三二年三月農業総研が発行、各大学等に寄贈され、三重大農学部図書館にも蔵書となっている筈である。当時私もそれを読んで記憶するが、我国で謂えば飛鳥期初期に当る北中支の庶民の生活法即ち作物・蔬菜・果樹・特用作物・牛馬羊から雞・鳥等の畜産・魚介類等の生産から加工利用・調理等、食品・飲料・衣料等に亘っての最も古い「生活科学書」と考え女子学生にもよく紹介したものである。

次にこれは、最近一部会員にお話したことでもあり簡単にするが、葛粉・糲粉・天花粉等と呼んでいたものを「澱粉」と総称するようになったのは何時からか？に就ては、二国・高橋・川上等の先生方により詮索された結果、天保八年（一八三七）津山藩出の医学兼理学者の「宇田川榕菴」の著した「植学啓原」が最初であることが判り、又製造に関する古書としては、筆者が伊勢市の神宮文庫等を調査して、文政十三年（一八三〇）発行の豊後出身の農学者、大蔵永常の著した精彩な挿絵入りの「製葛録」であることを見出して発表した。詳しくは「澱粉学会中部支部発行の澱粉」2号、12号、14号等を参照され度い。

最後に料理書等の著者調べのことであるが、今と異って、昔は「君子不近於厨房」とかで、諸侯や諸家の料理方等は別とし、一般紳士は料理等に関与しなかった様で、料理書の著者には変名、偽名が少くない。

現在でも雑誌等にもよく転載される有名な「豆腐百珍」は天明二年（一七八二）に其の「続篇一巻」は天明五年に著わされたが、著者は浪華の「何必醇」と云う中国人の様な名になって居り、其の詮索も諸家により久しきにわたって行われたが、最近、森詮蔵、川上博士等により本名は「曽谷之唯」号を「学川」と呼び印材に文字をほる篆刻等もよくすることから書道全集関係等より判明、大阪市で曽谷家の墓所等も亦知られる様になった。

厄年のせいか、竜頭蛇尾に終ったが皆様の御多幸を祈って筆を擱く。

会費納入のお願い

現在、昭和五十一年度までの会費を受付けておりますが、昭和五十年度までの会費を未納の方はぜひとも至急お送り下さいますようお願いします。なお昭和五十一年度までの所定の金額以上をお送り下さった場合にはお申し出のない限り残金は返却せず、昭和五十二年度以降の会費に充てんさせていただきますので、御了承下さい。各会員の皆様には御自身の現在（会報発送時）までの会費納入状況を記入したカードを会報と同封してありますので、よくお確かめの上、もし未納の会費がありましたならば、ぜひ納入に御協力下さいますようお願いいたします。会費は一年度につき五百円です。なお会費納入の際、振替用紙の通信欄に、「卒業回数」、「何年度会費」かを御記入下さいますれば幸甚です。

志登茂川昨今

江戸橋から下流の志登茂川では、今年も、秋風と共に釣人の姿が多くなって来た。せいごでも釣れるのであろうか。満潮の頃ともなると、かなりの人数が江戸橋の上からも釣糸を垂れている。それを見ながらふっと六年前のことを思い出した。当時、私は学生で研究室でごろごろしていのだが部屋の片すみにリール竿のあるのを偶然見つけて、同じ研究室にいた釣り好きと連立って志登茂川河口へ出掛けた。リール竿なるもので釣りをするのは、確かそれが最初であったように思う。いわれる通りにふっても、なかなか錘は思う方向に飛ばず、妙な所で水音をたてたりしていたが、それでも魚はつれてくれた。せいごであった。これはせいごといってすずきの子で食えばなかなかにうまいと。相手の釣り好きがいっていた。そんなものかと思いながら竿をふっている内に、餌のごかいも無くなり意気揚々と獲物を下げて研究室へと引揚げたのであるが、帰って来ると、そこにたまたま助手の先生がみえた。自慢たらしく魚などを見せて、さて、先生これ煮て食べてみませんかといったら、志登茂川のどこで釣ったとおっしゃるので、倉紡の向こう側の河口の所ですと答えたら、それでは僕は食わんといわれる。なぜですかと聞いたらこういわれた。つまり先生には一年にちょっとたりない赤ちゃんがいて、奥様は毎日そのおむつを、うんちの付いたのは別として、普通のやつは洗濯機で洗われるのだそうで、先生のお宅は江戸橋から倉紡の間にあったから従って〝お前たちの釣って来た魚もそのおしっこぐらいはなめているだろう〟という具合であった。それを聞いてなる程と思い、さてそう聞いたからには自分で持って帰って食う気にもならずしていると、同室の学生には剛の者がいて僕が食うという。以後、その魚がうまかったか、まずかったか聞いて忘れてしまった。

六年後の今、私はどういう訳か、江戸橋のすぐそばに住んで大学に勤め、家には一年とちょっとの赤ん坊がいる。女房はそのおむつをやはり、洗濯機で洗っている。今、学生が志登茂川に釣りに出掛けて、この魚食いませんかといって来たらどうしようかと思っている昨今である。

（15回卒　O生）

職場紹介

四日市合成株式会社

近鉄電車が塩浜駅を出て右手に石油コンビナートを見ながら海山道駅に差し掛る直前、三菱油化と三菱化成の間に四日市合成本社、四日市工場が見えます。

西側のコンビナート六呂見地区には六呂見分工場、茨城県鹿島には鹿島工場があり、五十年四月から東京事務所も設立され自社販売を始めております。当社は、三菱油化、第一工業製薬およびライオン油脂の三社が共同出資し、三菱油化の酸化エチレンをパイプ輸送により受入れ非イオン界面活性剤を大量に市場に供給すると共に、石油化学コンビナートの一員として、有利な立地条件を生かし石油化学工業品を原料とする各種化学製品の製造加工並びに販売をおこなっており、資本金は四億円、従業員総数三一〇余名であります。

会社設立以来、絶えざる研究開発をおこない、独自の技術で各種ポリエチレングリコール、ノニルフェノール、トリスノニルフェニルホスファイト各種グリコールエーテル、塩化コリン、各種グリシジルエーテル、各種アルカノールアミン、チオジグリコール、燐EO付加体の製造法の確立及び企業化に成功してきましたが、これらの成果は三重大学農芸化学科卒業者の努力に負う処大であると自負しております。

その陣容は、藤本製造工務課長(生物化学八期、以前は研究に従事)を頂点として、中村企画研究部第三研究チーム主任研究員(栄養化学十一期)、伊藤第三研究チーム副主任研究員(農薬化学十二期、修士一期)浅尾第三研究チーム研究員(農薬化学十九期、五十一年三月結婚予定)であり各自の特徴をフルに発揮して活動しております。(藤本―推計学大家、中村―企業化の神様、ゴルフの社内指導員伊藤―有機合成の自称マスター浅尾―機器分析プロ、実用化学工学のセミ大家)。新技術開発に関しましては、各自年平均二～三件の特許を申請すると共に、現業プロセスの改良等により社内表彰もしばしば受けております。

今後の方向としまして、私見ではありますが、コンビナートの一員として有利な立地条件及び蓄積技術を生かしながら、出来得る限り付加価値の高い製品を高度な技術を駆使して開発して行きたいと考えており、そのためにはフレッシュな頭脳を持った後輩諸君の参入を期待しております。

石油ショックに基因する不況のため当分の間、活発な拡張は出来ず残念ではありますが、明日を夢見て今日の試練に耐えて行く覚悟でおります。

三重大学とは近い位置にあるため、各研究室を訪れることが多く、先生方に種々御指導を頂き大変有益に思っておりますが、手前勝手ではありますが、より進んだ産学共同的なものにまで発展出来るよう深く期待しています。

開発を中心とした会社案内になりましたが、藤本課長も現在製造現場において中心となって活躍しているように実生産を安全に続行し、無公害を徹底するためにも相当に高度な技術力が必要であり、企画研究部員共々日夜努力している次第であります。

伊藤（大十二回卒）

明治乳業株式会社

私の勤める明治乳業大阪工場は生駒山麓の八尾市郊外に位置し、工場近辺は大阪府の緑地帯で総合グランドやプール等の設備があり環境的には恵まれたところといえましょう。

「明乳」という会社は、市乳、育児用粉乳、アイスクリーム等およそ牛乳に関連した商品は全て生産している他、生クリーム類、一般食品も含めて総合食品メーカーとして、成長して来ていますが何んといっても原乳の生産地を基点に物流が開始されるところから、工場は北は雅内（工場長は先輩の小野秀一氏）から、南は沖縄まで点在しています。

大阪工場は生産規模では全国最大規模で市乳のピーク時日均生産本数は百五十万本に達します。ライン別にみると壜装2ライン、紙装2ライン、乳酸菌、醗酵乳、生クリーム類各1ライン、アイスクリー3ラインを持ち、従業員約二五〇人で、年間通して昼夜連続作業をしています。

生ものである牛乳・乳製品を毎日これだけ都市流通をさせるという事は実は人知れぬ苦労もありますが、社会的責任もあり、やりがいのある仕事でもあります。

私は勉学に励むよりスポーツをやる方が多かったという学生時代の実績もあり、今でも野球部、バレー部の現役として、実業団の試合に参加している位で職場でもスポーツの催し物は多いし、申出はことわりにくく困る事もあります。

機械設備の導入管理、衛生管理での新技術の確立、物流合理化等、取り組む課題は山積みされており、勉強には事欠かないのが幸いです。これらの問題解決の為に、工場の全員を動員し、組織に活力を入れたいとの考え方から、グループによる活動を基盤にし、年に四回全員を集めて、研究発表会をやっています。

いろいろなテーマがありますが中には特許につながるものもあり、実に楽しみです。

新製品の開発では、学術的な勉強があまり自分自身でやれず困ることがありますが、味の研究や消費者要求を生きた市場から、身に感じ、これを商品化してゆく過程は、研究所等では味わえない楽しみがありやめられません。自分で問題点をみつけ、自分で仕事をつくり出す企業人となれと自分にも他人にも言って目標にしており、そんな意味では、実に自由な雰囲気の会社であり、工場だと思っています。

食品製造の技術は今からだと思える位に未開で不明な点も多く、技術者の必要性も高まって来ていますが当社の中で同窓生十余名が各工場や、本社、中央研究所に点在し技術確立の柱となるべく元気で活躍しております。

村田記（大学九回卒）

クラス会だより

19回生クラス会

私たちのクラス会は、毎年八月十日前後の土、日曜日を利用して行なわれ、昭和四十七年以来、今年で四回開かれている。これまでのクラス会の内容を簡単に紹介しますと、

○一回　榊原温泉紫峰閣、幹事は院生の中野、東海石黒、出席者約二十名、ほとんどがまだチョンガーであった。野郎ばかりでは殺風景と、幹事が同宿の保母さんのグループに話をつけ、女性らしき者が数人来たような記憶がある。

○二回　湯の山温泉、幹事は三重の浅尾と私であった。出席者十五名前後、この頃になると結婚が決った者が出てくる。私もこの年に決った。昨年の欠点を補うべく、芸者二名を呼びドンチャン騒ぎをする予定であったが、来たのは一人、それも芸者とは名ばかりでアテがはずれた。

○三回　大津石山、幹事は滋賀の中野、松本、新庄出席者約十五名、案は網舟の中で行なわれ夜の湖へ乗り出し、なかなか風情のある酒宴となった。翌日は車で京都へ、途中バラバラになり、ある有名な劇場へ着いたのは一台だけであった。

○四回　犬山、幹事は愛知の石田、石黒、古橋、出席者十五名、今回は、御多忙中の松嶋先生に御出いただいた。昨年の網舟に続く舟で、鵜飼を見ながらである。松明に照らし出される鵜匠と鵜には古来からある日本的な雰囲気が漂っているようであった。

以上が、これまでのクラス会である。幹事は毎年かわり、開催地が幹事在住の地付近になる。出席者の顔ぶれはほぼ決まり、遠方の者では二年に一度参加する者もいる。十九回生も半数以上が結婚して落ち着きが出たのか酒宴も次第におとなしくなっている。初回から私が写真を撮っているがこの時ばかりは皆、学生時代の顔にもどっているようです。

昭和五十一年は、三河地区であるが、さてどんな会になることか?。

辻　静夫（大学十九回卒）

松島先生を囲んで（第19回卒業生）

第三回クラス会印象後記

秋の鈴鹿連山を眺め乍ら級友集いて酒を酌み交そうと計画していたのですが、一役人殿の強い要請により予定を繰り上げて、九月中旬にクラス会を開くことになりました。

私自身志摩育ちであり、片田舎の、のんびりとした気分を味わってもらおうと紀伊長島の民宿を選びました。海の幸を鱈腹食べ、日頃の生活を忘れて語り合おうと呼びかけたところ、西は西条から、東は市原に至るまで、十数名の級友が、九月十四日の夕刻、人気の少ない紀伊長島駅に降り立ったのでした。民宿に着き一風呂浴びて休息したのち、会場に集まりました。

来年度の幹事を決めてから、担任であった熊沢先生を囲み、先生の乾杯の音頭を境として、いつものクラス会の雰囲気に移っていきました。その後、近況報告等あったらしいのですが、私の記憶は定かではありません。人の話によると、酒宴は十二時近くまで続いたそうです。唯何とも言えない良い気分であったことは確かです。

翌日は、二隻の釣り舟に分乗し、長島湾での釣りを楽しみました。午前六時出発（暁の出発）でしたからアルコールを下毒、代謝する暇もありませんでした。案の定、二日酔いと船酔いとをミックスしたような症状を呈する者が続出した。中には、そのような症状にも拘らず、釣り糸だけは手離さなかったほどの根性の者もいたと聞いています。

初体験者が大半を占めていましたが、キス、ゴマジロ等、大漁でした。長島湾遊覧を兼ねた舟釣りは、日頃、工場又は研究室で働いている者にとって、良い息抜きになったと思います。こうして天気にも恵まれ、成功のうちにクラス会を終えることができましたが、唯一つ残念であったのは、今日もチョンガーのみの集いであったことです。

チョンガーのクラス会から脱皮するために、結婚した者については一日に限り会費無料（但し有効期限〇年〇月〇日迄）ということにしたらどうかと考えています。来年の幹事さん、どうでしょうか。

小山旧幹事（大学二十回卒）

クラス会だより（22回卒）

卒業して一年半あまり過ぎた。十一月二日、三日に津市内で一泊して第一回のクラス会を開催しました。大学祭の日程に重ねたため十七名の出席がありました。

当日は昼頃からなつかしい顔がぞろぞろと研究室に集まって、背広姿で外見的には学生時代とはかなり変っていました。さらに驚いたことはアルコールがはいったら学生時代ならば飲めや歌えの大騒ぎでしたが、ところが今は静かに話しをしているだけ。一年半社会の荒波にもまれるだけでこれほど変わるものかと居残り組（院生）はただ驚くばかりでした。

まあ皆さん、久しぶりに顔を合わせたのだから積もる話もたくさんあるだろうと学生さんは静かにしていましたが、彼らからの忠告は「学生の間によく遊んでおけよ」ということで一同よく肝に銘じておきました。学生時代は化学の花といわれた女性もすでに姓の変わった人、もうすぐ変ろうとしている人と世の移り変わりを見せつけられました。こうして夜のふけるのも忘れて奥さん、子供同伴でいづれはやろうなどと馬鹿な話をしながら盛況のうちに終了しました。

吉田（大学二十二回卒）

＝農場トピック＝

シュッとひとふき十倍！施設栽培で燃料節約

附属農場の小川幸持助教授（農大2卒）は植物ホルモン、とくにジベレリンの植物生理に関して多くの研究業績をつんでおられるが最近、石油ショックを契機にして、植物ホルモンを効果的に使用し、燃料を節約した施設栽培の方法を見出し、今秋の園芸学会と植物化学調節研究会で発表され多大の反響をよんでいる。

キュウリは施設内で促成または抑制栽培で周年にわたって栽培されているが、冬期、温度が低いとどうしても果実の発育が悪くなり不良果が多く生じる。小川助教授らは開花期に色々な植物ホルモンを花に噴霧した。その結果、ぶどうなどに実用されているジベレリンA3では充分な効果はないが、A4＋7とベンジルアデニンを与えた花の果実は、あれよあれよというまにぐんぐん大きくなり、重さにして対照区の十倍および五倍に増加することを見出し、それを発表したものである。

これらの研究は、化学構造と果実の発育反応の関係という学問的に興味深い問題を提供すると同時に、省エネルギーが叫ばれている昨今、燃料節約した施設栽培下で、しかも優良果実の増収に効果的であり、施設園芸業界に大きく貢献するものと思われる。

大学時代の思い出

実習の思い出

昭和二十九年の四月も終わりに近いある日、午後の授業は農場で園芸利用実習という昼休み、数人の学生が奈良先生の研究室に出むいた。

「先生、今日の実習、バイトの説明会にいきたいので休ませ下さい」

「バイト、何するんだね」

「ハァ、朝日新聞のアンケート調査で、総選挙の予想です」

「今日は夏みかんの加工だが……。

時間がかかるのに、急に十人も休むと手順が狂うじゃないか。

終わったら早く帰って来て、実習に加わりなさい」

「ハァ、そうします」

県庁近くでおこなわれた説明会は意外におくれ、四時を過ぎてしまった。

「実習、もう終わっているんじゃないか」

「いやいや、帰って来ると言ってきたから、今から農場へ行こうや」

午後五時近いというのに製造室では実習の真最中である。

「すみませんでした」

先生は無言、首ひと振り。くだんの学生輩は横眼で先生を窺いながら実習に加入した。

カマドにかけた四斗釜の中では細刻みかんが煮えたぎり、まだペクチンの抽出中である。これから濾過、加糖濃縮、えんえんと製造工程は続く。

ようやく炊きあがったマーマレードを缶に詰め、一缶、一缶巻締める頃には、陽が落ちて久しく午後八時も半ばをまわっていた。空腹を抱えて暗やみの帰路を急いだ夜のことが、夏みかん加工の実習をするたびに思い出される。

所属農場が十粁離れた高野尾の地に移転してからは学生たちは週に一回、スクールバスで農場へ実習にやってきます。この実習を現在は農芸化学実習と称し、前期は農場でおこない、山口献三先生が主として担当されます。所属農場では、この農場でおこなう農芸化学実習を農場実習の製造実習と認め、農場職員二名を実習の補助にあたらせています。移転を契機に設備を更新充実し、製造室の面目を一新したことは、前年度総会の懇親会後にご覧いただいたとおりです。その反面、距離的制約はいかんともなしがたく、帰りを急ぐスクールバスをみるにつけ今昔の感をいささか禁じ得ません。

かっての製造室職員国府さんすでに亡く、村田平蔵さんもまた逝れて久しい。向井義栄氏は農場中堅技官として元気に活躍しています。

附属農場では農芸化学の学生をはじめ、農学コース経営、機械、土木各コース学生の農場実習を担当していますが、この農場実習は申すまでもなく附属農場でおこなう教育活動の中心であります。一次生産だけでなく農畜産加工などの二次生産も含めて、生産活動のおこなわれている現場の中へ学生を入れ、体験を通じて生産の実態にふれさせ、総合化された生産技術を理解させることにあります。

我々は、学生が将来置かれるであろう、農学、農業、関連産業の中で、己が位置の理解に役立つことを願って実習教育に携わっています。このようにして附属農場は太田先生（農14回卒）をはじめ五人の常駐教官が二十七名の事務、技術職員とともに運営にあたっています。

農学コースと農業経営学コースの学生は、入学早々の七月か八月に宿泊実習を課され、二年生になると三月に春期宿泊実習が課されます。いずれも四泊五日の実習がおこなわれますが、実習最終日は製造室が担当し、昔ながらの杵臼で餅をつき試食会をひらきます。学生たちが張りきって餅をつき、食べる準備をする様はまことにほほえましいものです。現在、農場の在り方や教育、研究について真剣な討議が農場自体でなされていますが、農芸化学の学生実習にも製造実習だけでなく、圃場での実習を加えるべきとの意見もあり、化学科の同意があれば、近い将来、圃場実習が加えられるかもしれません。

実習の思い出に加えて農場の現況など紹介させていただきました。

農場のある高野尾は津市に合併編入されたとはいえまだまだ自然に恵まれています。圃場にまぎれこんだ野兎を実習中の学生が追いまわしたり、タヌキの子を捕えて鋼室で飼ったりしたこともあります。また、雪の圃場を大キッネが散歩する姿を望見したこともありました。会員の皆さん、時には農場へもお立ち寄り下さい。お待ちしています。

（40歳代　藪本記）

私の学生時代

卒業してから早くも十年以上を経過し、学生時代のことはあまり記憶にはないのですが、思いつくままに書いて責を逸れさせていただこうと思います。小生の学生時代は昭和三十年代の後半で、丁度、池田首相が所得倍増計画を発表した頃であります。当時は現在の二十三号線から熱帯温室横への通りがメインで、まっすぐに進むと木造の旧農学部校舎の正面に当たり、通りの右側には水田があったと思います。その頃、上浜町にあったのは農学部のみで学芸学部（現在の教育学部）は市街地の真中にあり、二・三年次になってからも一般教養の単位を落としていると、かなりの距離を往復しなければならず苦労したものですが、この点は現在の学生は恵まれていると思われるが、近いから安易になるという逆の効果も見逃せない。先に校舎は木造と書いたが、それは農学部本館と大部分の校舎のことで、化学科の大部分の講座は三翠寮（現在は存在しない）に近い位置にあった二階建のコンクリートの建物にあった訳である。校舎といえば教室であるが、当時は何の意味かはっきり理解出来なかったが、博物教室という名の階段教室があった記憶がある。

しかし、当時の木造の建物は、一部を除いてあと片もないのはさみしい気がする。また、当時、化学科の建物の隣にはテニスコートがあり、距離が近いということから教官及び学生は、ひまをみつけてはラケットを握ったものであり、小生のクラスメートのM君なんぞは四年生の時には、卒論実験の合い間にテニスをやるというよりも、テニスの合い間に卒論実験を進めたという状態であったが、卒論発表会を堂々とやってのけて、更に立派な卒論を仕上げて卒業したことを覚えている。学生気質も現在とは若干違ってきているように思われるが、問題点を残す可能性もあり、ここでは論じないことにする。以上まとまりはないが三十才代の一人として拙文を連ねた次第である。

（30歳代　古市記）

ある失敗

学生時代の数ある思い出の中で「よき思い出」などと称されるものは数少なく「穴があったら入りたいようなもの」がその大半を占めている。この紙面を借りて、その中で最も印象深く残っているものを紹介するあえて紹介する意図は…。

二年前の丁度今頃、農芸化学会中部支部の例会が農学部で催された時のことである。我々院生が補助員として借り出され、確か、近藤君であったと思うが、彼と私がスライド係を担当することになった。少々粗忽な小生がそのような大役を演じたことにそもそもの間違いがあったのかも知れない。午前中の講演は難なく済み、午後、特別講師としてお招きした、広海先生が講演される時がきて、四十枚程のスライドを受け取り十枚ずつ四本のスライドホルダーに入れ、映写準備をした。二十分の講演時間にしては少々数が多いとは思いながらもスライドを進めた。そこまではよかったのである。

時間丁度で無事講演も済み、ほっと胸をなで下す間もなく、近藤君が蒼ざめた顔をして「一本ホルダーが残ってるぞ。お前写し忘れたな」と言うではないか。一瞬、気が遠くなる思いがし、何が何んだか訳が分らなかったが、やがて自分のしでかしたことの大きさに気付き、背中を冷たい一筋の汗が流れた。それにしても、普通の演者なら、スライドが一枚抜けたり、順序が入れ代わっただけでも大変なことなのに、十枚も抜けても、平然と講演され、誰一人としてそれに気付いた人がいない様子とは。

早速、広海先生に詫を言いに伺うと「よく上手にスライドを抜いてくれたね。お蔭で時間に終われて助かったよ。時間内に終わりそうもないので弱っていた所だったんだよ」と意外な返事。あんな失礼なことしてこんな結末になろうとは思いもよらなかったのである。

私は先生のうまい執り成しに感謝するとともに、機転のよさには、敬服せざるを得なかったのである。

註　1)近藤君……現在、カルピスKK勤務

2)広海先生…京大教授専門は酵素の反応速度論等

（20歳代　時田記）

長瀬先生、喜寿金婚祝賀会

昭和37年に退官されました長瀬重蔵先生は今年めでたく喜寿と金婚をお迎えになりました。この二重のお喜びをお祝いするため秋も深まる十一月三十日榊原温泉の白雲荘に長瀬先生御夫妻をお招きし、旧専攻生と近郊の諸氏にお集まりいただきさゝやかながら祝賀会を開きました。生恒公労協のスト権ストで私鉄を乗りついで遠方より馳参じてくれた方もありました。先生は益々御壮健に食品製造に関する古文書をお調べになったり、長い研究生活の業績をおまとめになったりの日々と伺いました。また金婚を迎えられた御夫妻にとっては正に激動の昭和史そのものであり御苦労の一端など聞くことができました。

先生を囲んで祝杯をあげながら時を過し、最後に御夫妻がいよいよ御健康でダイヤ婚式を迎えられることを祈願し万歳三唱してお開きとなりました

岡本（大学一回卒）

来年度の卒業生をよろしく

オイルショックに続く不景気のため、今年の卒業予定者の就職状況は非常に悪いものです。来年度も日本経済の好転はあまりかんばしくない模様ですので心配していますが、よくしたもので、「家貧しくして孝子あらわる」（少々時代錯誤的なことわざで失礼。しかし、会社の幹部級の年配にはこの方がピンとくるのではないでしょうか）のことわざにありますように、来年度の卒業生に対する諸先生の評価は〝近年稀に見る優秀な学生が揃っている〟そうです。

就職難の折から、来年度に入りますと会社訪問等と先輩方の御世話になる事が多いと存じますが、よろしく御指導頂きまして後輩の路を拓いて下さる様に御願い申し上げます。また、この機会にぜひ良き人材を確保して頂きたいと思いますので、入社に関する資料等を御連絡頂ければ幸いです。

お知らせとお願い

◎近末貢元教授逝去される：昭和五十年十月近末貢先生が逝去されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申しあげます。先生は、三重大学教授・奈良女子大学教授をご歴任後、聖母女学院短期大学学長としてご活躍中でした。

◎田口寛教官農学博士の学位授与さる：昭和五十年九月二十三日京都大学より農学博士の学位を授与されました。論文題目はStudies on quinolinate phosphoribosyltransferaseです。今後、ますますのご発展、ご研鑽を祈ります。

◎昭和五十一年度総会五月下旬予定：三翠化学会、昭和五十一年度定期総会は五月下旬の日曜日（二十三日あるいは三十日）を予定しています。会員諸氏の多数のご出席をお願いします。

◎「三翠化学」の原稿募集：三翠化学会発足以来会報をすでに四回発行してきました。

今後、年に一回～二回発行を続けていきたいと考えています。

会員相互の連携・情報交換をするために大いに活用してください。内容の充実をはかるため会員諸氏の投稿を大いに期待しています。どんな原稿でも大歓迎です。

駅伝競走今昔

高農時代には、年中行事としてお田植祭、兎狩、登山、運動会、記念祭（現大学祭）、駅伝競走などがあり、季節にあわせて全校あげての行事が古き良き思い出として卒業生の間で語りつがれています。年々すたれ行くこれらの行事の中で各科対抗駅伝競走だけは今なお盛大に行われております。以前と変ったことと言えば、交通混雑のためコースが左記のように変更されたことと、ウーマンパワーの台頭があげられます。

駅伝競走経路の変遷

第一―八回
（大正十三年―昭和七年）
本校松阪間往復四十二キロ
第九―十二回
（昭和八年―十一年）
伊勢神宮往復八十キロ
第十三―四十三回
（昭和十二年―四十二年）
本校松阪間往復四十二キロ
第四十四回
（昭和四十三年）
三重会館前長野峠往復三十八キロ
第四十五―四十七回
（昭和四十四年―四十六年）三重県庁前長野峠往復四十一キロ
第四十八―五十一回
（昭和四十七年―五十年）津公園長野峠往復四十四キロ

松阪往復は旧道のときと国道二十三号線のときとに分れますが、旧道のときには、あの曲りくねった土の道を自転車の伴走で走り、競り合いの際に勢い余って伴走車が田圃に突込んだり遊郭の二階からの黄色い声援にはげまされたり変化に富んだものでした。現在は津駅裏を出発点として西方の長野峠を往復します。全コース舗装されておりますが峠附近はまさに心臓破りの登り坂で走ると言うより歩いているような格好のモヤシッ子も多いようです。一方では運動クラブの女子学生がサッソーと風を切って走っている姿も昔にはなかった風景です。全体のレベルと比較すると最近の農芸化学は弱いので残念でなりません。

S生（農専三回卒）

クラスのまとまり

本号ではいくつかのクラス会の紹介がなされているので我々の例もあげてみよう。我々六期生は卒業後はや十八年にならんとしているが、クラス会はまだ二回行っただけであり、三回目は二年先の予定である。第一回目は卒業後なんと十年目であった。こんなふうに書くと余程まとまりのないクラスとか、クラス会を開くために骨折る世話人がいないのであろうと思われるかも知れないが決してそうではない。我々のクラスは在学中非常にまとまりの良いクラスであったと私自身思っているし、また先生方からもそんな話を聞いたこともある。これは何かと言えばすぐコンパをするとかみんなで統一行動をとると言うことではない。個人個人をみるとそれぞれ興味を示す対象も異なり、どちらかと言えば頑固者が多かった。それでもなんとなくよくまとまっていた。これは今振返ってみると、結局人の行ったことにケチをつけるような者がいなかったこと及び色々な行事に骨惜しみする者がいなかったことによるのであろうと思っている。卒業後このまとまりはよく保たれ、それぞれの消息は完全にキャッチされ消息不明は全くみられないこれには杉本君はじめ、各地区のまとめ役の尽力によることも事実であるが、やはり各人の自覚によるものであろう。これからもこのまとまりを保ってゆきたいものである。

高橋（大六回）

昭和五十年度 会費納入者名簿

（敬称略、昭和五十年十二月二十日現在）

専一回
今西勝、笠井邦孝、粥見惇一、北岡一晃、倉田三郎、栗田寿一、嶋林幸英、庄山貴芳、中尾勢津夫、西村謙二、本根史郎、松林茂、山田茂樹、若林長生、渡辺和巳

専二回
砂野正、石井清、市橋正幸、大井淳弐、岸本久男、竹内巌、積木憲郎、中川潔彦、長野修、新良貞雄、藤井淳一、藤枝俊夫、藤山寛之、前田巌、前田尚、吉田誠之、若林敏昭

専三回
伊藤研、市川淳、市川陽子、神田芳文、草深新三郎、小林隆、嶋田協、鈴木幸郎、田畑龍、高野隆男、中村宣博、原田俊夫、宮本敬三

大一回
青木みか、高橋一郎、西川英郎、福田支、藤本嘉教、前田巌

大二回
足立進、小林重一、近藤清夫、嶋林幸英、鈴木康市、竹村憲次、筒井文生、鳥羽弘人、中川規雄、橋本忠、服部圭助

大三回
伊佐浄、伊藤ますみ、田中大作、谷池主税、辻村恒、内藤田鶴、野村勝重

大四回
稲葉五郎、梅田尊夫、豊井晃久、勝田敏雄、佐藤美津子、斉藤脩郎、渋谷明、田井中祐輔、辻敬一、宮本敬三、村上昌広、藪本義雄

大五回
芦田晨、板谷昇次、加藤晃、川部弥代次、草川勉、黒野隆、滝川重喜

大六回
伊藤芳直、太田富貴雄、川上治夫、川内康弘、佐野正、嶋田協、高橋孝雄、竹内義矩、永田義明、西沢寅夫、深谷広成、松尾次雄

大七回
渥美泰延、石原暁、今井照夫、今川章司、小木曽大、小野正秋、加納健一郎、金子嘉宏、須谷政徳、鈴木将悦、林雅敏、半根郁夫、樋口富男、米山恵美

大八回
上井淳弘、加藤公一、木村晴雄、中村守人、原弘、藤本公三、森岡正、山口宗男、吉村文夫

大九回
大嶋岩雄、木下崎次、小木曽政之、竹尾熙方、中野弘人、平田忠司、今井滋、村田東洋雄、森島紀道、米窪豊

大十回
荒木宏、伊藤道子、板倉徳雄、岩尾敏之、小出章夫、下孝一、杉山敏、田代博久、長谷川宏、古川和義

大十一回
梅田紀彦、春日健、熊崎安襄、佐野利彦、林茂範、林真栄、水谷正紀

大十二回
相松篤光、伊藤泰男、岩佐則武、大橋藤五郎、鋤柄修、鈴木克己

大十三回
稲川清美、金森広夫、川尻泰洋、木村光則、古市幸生、谷由美子、山下亨、山羽好文、松崎邦忠

大十四回
阿部政夫、市原茂幸、宇野清隆、岡崎直人、北浦正樹、佐藤義彦、坂野保英、田尻恒明、田中幹郎、舘行生、戸嶋進、中川富士彦、中地武典、西野忠明、西元勝也、宮城久茂、村田金佑

大十五回
内山健一、桑原政宏、榊原徹、田中伸三、名和義彦、橋本時雄、馬場直道、増井宏至、小畑仁

大十六回
池山洋久、駒田誠、坂井重徳、島村順三、杉崎護、杉崎清子、本庄達之助、山田覚

大十七回
榎本雅紀、佐藤信之、田口寛、服部博保、平田秀彦、前田真彦

大十八回
石崎久嗣、臼井英夫、江島政之、加藤光義、佐脇徹也、田巻聡、内藤茂三、仲家彰、藤原剛、水本章、山本茂樹

大十九回
浅尾由一、新庄家嗣、竹内寿一郎、辻静夫、松本孝

大二十回
小田豊博、小山司郎、五藤耕次、伊藤知明、伊藤憲治、坂本秀雄、鈴木清、田中実、高須淑夫、坪内一夫、永田哲英、広瀬和久

大二十一回
伊藤哲雄、神戸千幸、近藤君夫、田立春夫、時田憲章、結城真由美、和仁外雄

大二十二回
秋山峰子、浅野真逸、飯田貴史、磯嶌幸市、転次郎、上原勇作、大島勝、大野俊彦、大野みち子、岡本平、河合美江、清原健次、佐藤清秀、三大寺章、柴山広己、鈴木義典、鈴木義仁、高見賢一、中川豊、中島亨、中島靖広、丹羽誠一、深津顕、古川公男、本多芳広、松永幹生、水谷孝至、水谷礼子、山口政行、山本雅己、吉田文人、渡辺基行

大二十三回
伊藤佐英、大橋淳子、飯田徹也、稲熊乙、岩田陽子、鵜飼文雄、浦田茂也、大沢潤、河合恒明、河合照光、河合晴夫、木村茂樹、栗本正弘、沢田安雅、高橋一、谷智津子、谷口一彦、谷田孝雄、寺沢修平、中神省吾、長橋幹雄、仁保健、畑敏男、平野敏、松下富士子、森彰、山田正弘、山本佳市

院一回
伊藤泰男

院二回
橋本時雄、古市幸生、小畑仁

院三回
北浦正樹、島村順三、本庄達之助、杉崎清子

院五回
石崎久嗣、加藤光義、田巻聡、内藤茂三、水本章

院六回
駒田耿子、松本孝

院七回
沢田正徳、西田正治、伊藤知明、小田豊博、小山司郎、五藤耕次、田中実、永田哲英、広瀬和久

院八回
久松真、平塚暁、伊藤哲雄、時田憲章、近藤君雄

以上領収、御協力ありがとうございました。これを以て領収書に代えさせていただきます。

（会計幹事）

スポーツのすすめ

毎週水曜日の夕方になると部屋の電話がリーンと鳴り受話器を取ると、「モシモシ、今日どうですか」、「ウン、やろう」でガチャリ。大学の職員卓球部の練習の呼出しである。部員数約十名、いずれも三度のメシの次に卓球が好きというピンキチばかりである。

卓球なぞやったことのない人にとってはあんなハネツキの真似事のどこがおもしろいのかということになるが我々にすればこんなおもしろいスポーツはないのであって気分がむしゃくしゃする時にピンポン玉を思いきりぶんなぐって一汗流せばたちまち気分爽快、ストレス解消にもってこいである。

これは卓球に限らずどんなスポーツでも同じであろう。わが卓球チームの成績はなかなか優秀で、昨年は4回の対外試合のうち三回優勝、あと一回はあまり三重大ばかり勝っては他のチームがヤル気を失くすのではないかと心配して戦力を落としたところ見事に一回戦で敗退し、慢心は慎むべしで人生勉強にもなる。

とかく現代人は運動不足になりやすいが、健康維持に適度の運動はかかせないもので、ましてや現在のような不況、インフレの時代には健康であることが何よりの財産である。しかしスポーツをやるにも場所その他の条件に恵まれないという人、そういう人は是非マラソンをやって下さい。これなら誰でもできます。私はマラソンはあまり好きではありません。好きでもないのになぜ人に勧めたりするかというと、友人にマラソン気違いがいて彼は一日十キロ程のマラソンを続けているそうですが一度自分の実力をためしてみたいから三翠化学会として大学の駅伝に参加しょうと企てています。

これならタイムは計ってもらえるし競争相手もいてちょうどいいということで現在その気になってるのが四名、あと八名今年十二月の駅伝までに集めようというわけで、会員諸氏はそれまで大いにマラソンに励みふるって御参加下さい。

（大二十　三重大医学部　田中　実）

雑談室　くりの話

栗農林一～四号にはどういう訳か全て山の名前がついている。農林一号、丹沢いわずと知れた神奈川県中部にそびえる山塊の名である。この品種が神奈川県平塚市にある農研園芸部（現農林省果樹試験場）で育種されたことと考え合せると第一号にこの名を附けたことに合点がゆく。

農林二号伊吹、同三号筑波、同四号石槌でこれらはいずれもクリの致命的な害虫であるクリタマバチ抵抗性品種育成を目的として、丹沢と同じく農研園芸部で育成されたもので、いずれも昭和二十二年から二十四年にかけて交配され、選抜をへて、丹沢、伊吹、筑波は昭和三十四年三月に命名され登録された。又石槌は昭和四十三年に同じく命名されている。

交配から命名されて世に出るまでに十～二十年の歳月が費されており、思えば大変な苦労の末に作り出されたものだ。所でこれら四品種のほかに、旧来の品種である銀寄（ぎんよせ）、豊多摩早生（とよたまわせ）、乙宗（おとむね）、赤中（あかちゅう）などもクリタマバチに抵抗性を有する品種とされているが、最近これら抵抗性品種を侵す新しい系統のクリタマバチが出現しており、その対策が問題になっている。

最近クリタマバチの方でどう変ったかについて研究がなされているようであるが、いずれにしても正月以来猛威をふるっているインフルエンザと同じで、人間がワクチンを作って対抗するとさっそく次の新しい系統が出現するのと同様に、抵抗性品種を育成すると抵抗性品種を侵す系統が出現する。誠にいたちごっこである。

（O生、大学十五回卒）

農芸化学科の昨今

三翠化学第一号（昭和四十九年三月発行）では三重大学の現状を中心とし、また第二号（昭和五十年一月発行）では恩師の近況を中心とし、それと関連して農芸化学科の現状を記してから満一年が経過した。今回は、既に八〇〇名の卒業生を社会に送り出したわが農芸化学科の昨今を、各研究室の状況を中心に紹介することにした。

一月十日現在で、七講座十七名の教官、二名の職員大学院生十一名、四年生三十四名、三年生二十八名、一年生三十一名が総メンバーである。教職員・学生それぞれの分野で頑張っておりその成果は徐々にではあるがあがってきている。

教育面での大きな変革はカリキュラムの改正がなされた事であろう。既知のように、昭和四十年にコース制をとると共に、専門基礎科目の充実を重点としてカリキュラムの改正を行った。その成果は大いにあがり、優秀な人材を送り出してから丁度十年目に、再度カリキュラムの改正が行われたことになる。基礎科目の充実・専門必須科目の大巾な減少、選択科目の増加をはかり、柔軟性のあるカリキュラムを編成し、学生の自主性の尊重と養成、学力および勉強意欲の向上、非常なスピードで発展する自然科学分野に巾広く、しかも弾力的に対応し得る人物の養成等を主眼としての改正である。従来は専門課程で専門基礎科目二三単位必須科目六一単位、選択科目七単位以上計九一単位以上および卒業論文六単位、合計九七単位以上修得することが、卒業の条件であったが、今回の改正では、専門基礎科目二十単位、必須科目三三単位、選択科目三六単位、以上計八一単位以上および卒業論文六単位、合計九五単位以上を修得することとし、既に昭和五十年度の入学者より適用している。このカリキュラム改正の成果が、今後どのような形で現われてくるか、大いに注目しなければならないだろう。

一方、研究面でも漸次活況を呈してきている。教官陣の若返りに伴い学会発表が活発に行われている。多年に亘る研究の成果が認められ、学位を得られた教官の講演会、修士論文の公開発表、卒業論文の発表会も恒例化し、毎回活発な討議がなされている。つぎに、各講座の陣容と研究テーマを略述しよう。

一、土壌学・肥料学研究室（第一講座）

一号館一階の南側に位置し、北岸・梅林両先生に加へて、小畑仁先生（農芸化学科第十五回卒業、昭和四十九年九月農林省から着任）の三名と、修士一年一名、四年生五名（内、女子二名）がそのスタッフである。植物の重金属元素、高等植物のアシラーゼ、土壌を対象としたガス環境等に関する研究が主なテーマである。

一、生物化学研究室（第二講座）

一号館二階の中央にあり嶋林、高橋両先生に加へて田口寛先生（農芸化学科第十七回卒業、昭和四十九年六月着任）の三名と、修士二年二名、同一年一名、四年生六名（内、女子一名）および研究生一名がそのスタッフである。動物のヌクレオチドと核酸および動植物の蛋白質（赤血球凝集素や酵素類）に関係した研究がなされている。

一、農産製造学研究室（第三講座）

一号館二階南に位置したこの研究室は、奈良、山口小宮の三先生と、修士一年一名、四年生六名（内、女子一名）からなっている。澱粉等の物理的性質や農産製造製品（コンニャックや茶）の品質に重要な影響を与へる成分に関する研究が行われている。

一、醗酵学研究室（第四講座）

一号館三階中央に位置し松嶋、嶋田両先生以外に、修士一年一名、四年生五名（内、女子一名）が加わっての陣容である。糸状菌の酵素と阻害剤や、異常条件下での細菌の生育と生理が主な研究テーマである。

一、栄養化学・畜産物利用学研究室（第五講座）

一号館一階北側に位置し石川、古市両先に加へて、修士二年一名、四年生一名がそのスタッフである。消化指標物質および豚の消化酵素に関する研究が行われている。

一、農薬化学研究室（第六講座）

一号館二階北側に位置し熊沢、小山司朗（農芸化学科第二十回卒業、昭和四十九年四月着任）両先生および修士二年一名、同一年二名、四年生五名（内、女子二名）がそのスタッフである。有機農薬や有機天然物の物理・有機化学的研究と植物の生長調整物質に関する研究が主要テーマである助教授であった岩村俶先生は、昭和五十年七月から京都大学農学部食品工学科に転任されました。目下教育・研究の両面で大活躍しておられます。今後の大成とご発展を祈る次第である。

一、食品化学研究室（第七講座）

一号館三階南に位置したこの研究室は、赤木、山田両先生に加へて、修士一年一名、四年生六名（内、女子一名）が構成メンバーである。活性汚泥、酵母の飼料化、澱粉の構造等に関する研究が主要テーマである。

一月十日現在、修士論文卒業論文の締切り期日が目前に迫っており、各研究室とも夜おそく迄活気を呈している。修士・学部学生諸君の最後の追い込みに期待をかけている。各種の精密分析器械もおいおい充実してきて、一応の研究ができる態勢が整備されてきた。今後ますます教職員それぞれの専門分野で頑張り、名実共に「三重の農芸化学」として一流の農芸化学科に発展しなければならないと考へているのは、あながち筆者一名のみではあるまい。

三翠化学第三号に「長命の問題」と称する貴重な原稿をいただいた田中先生、本紙（第四号）に「老人の社会観」あるいは「古典漁り」の原稿をいただいた稲川先生、長瀬先生は、共にご健在であられます。

今後ますますのご健勝を祈ってやまないのであります。岩本、滝両先生は林学園女子短大あるいは松阪女子短期大学で教鞭をとっておられます。私共、卒業生一同にとりましてはまことに心強い限りであります。

なお、諸先生方の住所、左記の通りであります。

田中庄助先生　津市江戸橋一丁目＝電・〇五九二―三三二―四〇七七

稲川次郎先先生　津市広明町八五＝電・〇五九二―二八―七二三五

長瀬重蔵先生　津市栄町二丁目一七三＝電・〇五九二―二八―六八四五

岩本喜一先生　鎌倉市由比が浜二―二〇―二八＝電〇四六七―二五―三〇七五

江南市藤ケ丘四丁目一ノ一江南団地八三―一〇五電・〇五八七五―七―二三二九

滝　基次先生　津市広明町八五＝電・〇五九二―二八―八七九二

（編集子）